

【高齢福祉課長】

お待たせいたしました。ただいまから東京都北区おたがいさま地域創生会議の30年度第2回会議を開催いたします。

事務局を務めます高齢福祉課長でございます。よろしくお願いいたします。

ここからの議事の進行は、会長にお願いいたします。

【会長】

それでは、約半分の委員の皆様方、ちょっとたて続けでお疲れさまでございます。それでは、これから議題に入りたいと思います。

まずは、議題の1、高齢者あんしんセンターにおける活動状況について、（1）地域ケア個別会議の開催状況について、事務局からご説明をお願いいたします。

【事務局】

事務局、高齢相談係より説明をさせていただきます。すみません。座って説明をさせていただきます。

資料2、「平成30年度地域ケア個別会議開催状況について」をごらんください。地域ケア個別会議は、各高齢者あんしんセンターが主催しております。行っている内容としては、地域の居宅支援事業所のケアマネジャーさんにケアプランを提供いただき、個別事例の検討を行っております。その中で、個別事例の支援についての検討にあわせて、その方から見える地域の課題についての発見、それから共有、ネットワークの構築を目的に行っております。平成30年度は、昨年度同様、各高齢者あんしんセンターで2回を開催予定であります。

その内容なんですけれども、下に開催実績をお載せしております。初回が、平成31年3月7日現在ということで、17包括の予定が載っていないんですけれども、ここに載っていない上中里つつじ荘高齢者あんしんセンターと、王子高齢者あんしんセンターについては、3月に開催予定となっております。また、1回しか載っていないところも、この3月7日以降に開催をしている予定です。ちょっと、口頭で申しわけありませんが、補足させていただきます。

行っている主な検討内容は、それぞれのところを詳細にごらんいただくようになるんですけれども、裏面に行きまして、表の下に、ケア会議に関する特徴といいますか、考

察を載せさせていただきました。28年度から開催している地域ケア個別会議なんですけれども、例年と傾向が同じような感じなんです、取り上げる事例としては、認知症の方、なおかつ独居の方、それから支援の拒否がある方についての事例が多くなっております。

このうち、ことし特徴的だったなというふうに感じるのは、災害時に、どういう対応を支援者がすればいいのか、必要なかというようなことの検討。それと、オートロックの住居に住んでいらっしゃる方々の、やはり、例えば何かお家の中で連絡がとれない状態になっているときに、どのように対応するかとか、災害が発生したときに、どういうふうに対応するかといったようなことを検討事例として取り上げている高齢者あんしんセンターが複数ありました。今年度から、避難行動要支援者名簿の避難行動個別計画というものを作成することに着手をしております。そういった背景があり、居宅介護支援事業所のケアマネジャーさんにもご協力いただいているという流れがありますので、そちらへの課題意識が向いているかなというふうに感じております。

また、こういった個別ケースの課題から、地域でどんな見守りが必要かとか、孤立を防ぐ地域づくりをどうしたらいいかという検討へとつながっていることを申し添えます。

以上になります。

【会長】

ありがとうございました。あんしんセンターの活動状況に、地域ケア個別会議の開催に関してご説明いただきました。委員の皆様からご意見、ご質問がありましたら、承りたいと思います。いかがでしょうか。

じゃあ、ちょっと私のほうから確認なんです、それぞれ26の開催実績というところで、結構共通している課題も出てきているというようなことなんです、基本的に、まあ、これ、会議をした後、ある程度もう解決策というのが見えたのか、あるいはもう見えたものに関しては、他のエリアなんかでも、この解決策というのが共有されているのかといったような、出口の部分に関してはどのような状況かというのを、もし、ちょっと教えていただければと思います。いかがでしょうか。

【事務局】

事務局、高齢相談係です。

各事例に関しては、解決まで至っているものと、やはり、取り上げている事例が、比較的、対応困難な方が多いかなというところで、なかなか、そのきれいな解決策が見え

ないというところも多かったかなと思います。特にオートロックのマンションに関しては、やっぱり、どこの地域でも、共通するような課題になってきているかなというところで、見守りに関して情報を共有できる部分があったら、していけたらいいなというふうに思っております。

また、その結果に関して、高齢者あんしんセンター全体で共有を、まだちょっとできている状態ではないので、こういった会議資料等を踏まえて、また皆さんと出ている課題については検討していきたいなと思いますのと、検討した内容から上がっている地域課題については、各地域包括ケア連絡会という次の報告事項等に結びついているようなところもございます。

【会長】

恐らく、その個別会からケア連絡会へのその連動する仕組みとか、フィードバックですね。そこが一番大事だと思います。せっかく、いい皆さん方の経験とか、そういったものですので、そのシステムをうまく連動するようにお願いできればと思います。

ほか、いかがでしょうか。

それでは、ひとまず次の案件ですが、平成30年度3圏域地域包括ケア連絡会の報告について、こちらも事務局からご説明をお願いいたします。

【事務局】

引き続き、高齢相談係より報告させていただきます。

資料3、平成30年度3圏域の地域包括ケア連絡会報告になります。こちら、地域包括ケア連絡会というのは、今まで王子、赤羽、滝野川というふうに3地域にくくって連絡会をしておりましたが、その3地域で行っている地域包括ケア連絡会になります。こちらは、各高齢者あんしんセンターで行っている地域包括連絡会、また、先ほどの地域ケア個別会議から出てきた課題について、地域の中で、比較的近いエリアで解決できることがないかというようなことを検討して、あれば、それをどういうふう実践していくかということを取り組んでいこうという会議になります。1番が王子圏域の地域包括ケア連絡会の報告になります。3圏域とも年に一回、開催いたしました。王子圏域については9月、お示しの日時で開催をしております。59名の方に参加いただきまして、テーマを多世代のテーマにしました。多世代コミュニティの構築を目指してPart2ということで、昨年度に引き続きのテーマなんですが、今年度は、見守りに関して話したいということで、「作ろう地域の目」というサブタイトルにしております。

実施した内容としては、一つ目に、見守りを行っている多世代の団体からのご発表、それと、スクールコーディネーターという方が地域にいらっしやいまして、そういう方がどんな活動をしているのかという発表。警察署のほうから、子ども110番の活動紹介ということを行っていただきました。その後、グループワークを各地域、各高齢者あんしんセンターごとにグループを組んで、検討しております。各地域の見守り等の活動を、地図を使って共有をいたしました。その結果、まとめという感じなんですけれども、見守りを行っている団体、それから場所をマップに書き込んでグループワークをしてきました。この内容を掲示しているような包括もありますが、この情報をさらに充実していけるといいねという意見が出ています。

それから、多世代共通の課題があるということはわかりました。その課題に、じゃあ、具体的にどうしたらいいかというと、直接的な取り組み、解決には至っていないんですけれども、多世代交流が必要だということを今後も、共通の理解として継続して取り上げていきたいというまとめになりました。

2番目に、赤羽圏域の連絡会です。日時は、お示しのとおりで、31名の参加者の方で検討いたしました。テーマが、「地域のつながりを広げよう～たかがベンチ、されどベンチ～」という形で、外に出てベンチがどんなところにあるかというようなことで、まちの中の様子を知りながら、見守りと何かつながるところがないかなというような検討になります。

一つ目としては、赤羽圏域の街中ベンチストーリー。ベンチという、そのものに限らず、花壇の縁石もベンチになりそうとか、岩淵には中華屋があるよとか、そういった地域の情報を集めてベンチの場所を確認して行って、この写真は、こんなところにベンチがあるねというようなマップ上の成果物といいますか、そういったものになっているとのことです。

その後に、グループワークでベンチ情報の共有、どんなベンチが、どんな役割を持っているのかというようなことを話し合いました。まとめとしては、例えば参加した事業所の方が実際にベンチを置くことを検討してもいいねというような案もありました。今回の連絡会の報告を高齢者あんしんセンターの通信に載せたところ、興味のある住民の方から反響が寄せられたということです。ただ、防犯上の問題もあって、ただあったらいいなと思うところに、必ずしもベンチが置けるとは限らないというような意見もあり、そんなことも考える必要があるなということを知ることができました。

3番目が、滝野川圏域です。日時はお示しのとおりです。25名の参加者で検討いたしました。テーマは、「地域から孤立する人々～集合住宅における見守り～」。先ほどの地域ケア個別会議からも共通するようなテーマになります。内容としては、事例紹介ということで、警察署が安否確認に入るような事例は、どんな事例か。ケアマネジャーさんからは、管理人常駐ではないオートロックのマンションで、安否確認ができない住民の方に、どう対応していくかというような事例紹介があり、その後、グループワークをしました。主にはマンションや、オートロックの建物に暮らす人の見守りです。まとめとして、参加者が今回の内容を自分の地域でも話をしていこうというような意見をいただいたり、見守りの重要性ということを改めて認識して、地域のほうに持ち帰っていただくことにつながっています。

また、さまざまな社会資源を利用できる可能性への気づきがあったということで、それぞれ参加された方からの知恵の共有というのがありました。

最後に、オートロックマンションの住民に、どうアプローチしていくか、これが課題ではありますので、今後も引き続き検討していきたいということでした。

報告は、以上です。

【会長】

ありがとうございました。3圏域の地域包括ケア連絡会の報告でございました。委員の皆様方、ご意見、ご質問、いかがでしょうか。

委員、お願いします。

【委員】

資料2と3と、まとめた形の感想ですけれど、ケアマネジャーの場合、ともすれば個別援助、対利用者さん家族との関係で終わっている。それで終わってしまうということが多くなんですが、それを通じて地域を知っていく、地域の中でのその方の役割や、または、自立支援に対する取り組みはというときには、介護保険だけで抱え切れない地域の社会資源をしっかりと知ってというのは、一般的にもよく言われることですが、それをなかなか日々の現場でやっていくには、難しい部分も感じています。

そういう中で、ともすれば困難事例、まあ困難という言葉は使いたくはないですけど、そういった事例、多問題を抱えた方について、あんしんセンターさんの応援をいただくことが多いんですが、特に、この高齢相談係からの資料3のほうのご説明などは、そういったことに至らずまでも、地域を知って見守っていくというところでのさまざまなヒ

ントやアイデア、具体的なその情報がすごく入ってきていると思うんですね。で、かつ、資料のこの2のほうの裏面に出ている、主な出席者のところで、へえというようなところは、こんな、肩書を見るだけでも、こういう方が会議に参加されていらっしゃるというところを、もっとその、ケアマネの仲間の中にも、こう広げながら、何かあったら、ちょっとヒントを包括さんにもらえるんじゃないかいと。もらうというか、要するに話ができるんじゃないかいという共有の場を、ぜひ、もっともつとこちらも、会の中でも取り組みたいと思っていますし、恐らく、こういう方が会議に参加されたんですか、連絡会に来られたんですかという背景には、きょう来ていらっしゃる委員さんを含めて、日々の、見えない取り組み、ご苦労があったと思いますので、そういったところにすごく感謝です。よかったら、何かそのエピソードとして、そんなことを取り組むことで、新たな広がりができたなんていうことがもしあったら、ご発言いただけたらと思っています。

【会長】

委員、お願いいたします。

【委員】

高齢者あんしんセンターです。

私は、圏域として滝野川圏域のほうに参加をさせていただきましたというか、開催をしました。で、やはり、オートロックマンションの事例が、最近すごく続いているということがあって、こちらのほうの課題を今回やろうということになったんですけれども、結局、最終的には、答えは出なかったというのが現実なんですね。ただ、答えは出ないんですけれども、そのオートロックマンションについて、これからどうアプローチしていくかというところを、皆さんで報告に、何というんですかね、今まで埋もれていた課題だったんですけど、それが皆さんで、あ、オートロックマンション、若い人のものだというものではなくて、高齢者の方も、今たくさん住んでいるんだということを改めて理解していただいて、で、今回事例に出したケースでも、高齢者の方ではなかったというところがありまして、いろいろな世代の方にオートロックマンションのこういう見えない闇の部分があるというのが、よくわかっていただいたので、そこをわかっていただけただけでも、今回この会をやったということが、ひとつよかったのではないかなということと、あと、その会の中でも、例えばオートロックマンションに住んでいる方、皆さんに緊急連絡先なんかを、例えばこの制度的に位置づけていただくという手段もある

のではないかなというお話も出ましたので、今後どんどん、こういう話題については、深めていけたらいいなというふうに思っています。

【委員】

ありがとうございます。一言。

今、言われたことで、答えが出なかったけれど、その後のことがすごく、気持ちが感じました。よく、いろんな問い合わせ事というのは、答えが欲しくて来る方って多いかもしれませんが、それよりも一緒に考えるということで、実は多くのことが解決できちゃうというところでは、そういった姿勢で見ていただけるのは、すごいありがたいと思っています。

以上です。

【会長】

はい。ありがとうございます。

ほか、いかがでしょうか。

【委員】

一番初めに会長からのお話もあったように、この連動性ということが、とても僕も重要なことだと思っていまして、高齢者あんしんセンター単位で上げられてきた個別の課題から、この3圏域の連絡会へのこの会議をそれぞれやっていることは、それぞれ本当に重要なことであって、とても大切な意義のある会議で、話し合いも大切なんですけども、この連動性をどのように、こういう課題が挙げられたから、こういう連絡会を持って、だから、こういう政策形成だとか、だから、次、こういうふうにしていかなきゃいけないよねという道筋がある程度見えていかないと、ただ単に、単発的にやって、やっていることは、もちろん重要であって、多職種連携で大切なことではあるんですけども、その連動性というのが、どれぐらい確保できて、この地域課題をしっかりとこの圏域に集まって、もんで、こういうふうな話し合いをしていくというのは、どのぐらいできているのでしょうかということなんですけども。

【会長】

事務局のほうから、いかがでしょうか。

【事務局】

ご質問ありがとうございます。高齢相談係です。

資料1の委員名簿の裏面をごらんいただけるでしょうか。こちらに、北区における地

域ケア会議と協議体の位置づけということで、簡単なイラストになっている図を載せさせていただきます。一つ目に報告した地域ケア個別会議というのが、高齢者あんしんセンター単位で行っているもので、もう一つ、高齢者あんしんセンター単位での地域包括ケア連絡会という、個別事例ではなく、地域の課題を話し合おうという連絡会を実施しております。そういったところを、それぞれ高齢者あんしんセンターの主任ケアマネジャーを中心に行ったり、あるいは、生活支援コーディネーターを中心に行ったりしているのですが、各高齢者あんしんセンターの中で、そういった職種同士でしっかりといろんな取り組みについて話していただきながら、次の課題へとつなげていくような取り組みをしております。

ここには出ていないんですけれども、高齢者あんしんセンターの中に看護職がおりまして、認知症地域支援コーディネーター、あるいは、認知症地域支援推進員といった業務も行っております。そちらのほうからの検討も、この後、社会福祉協議会の委員の方から報告をしていただくんですけれども、ひとつ、事例というか、成果に結びついているものもございます。まずは、各高齢者あんしんセンターの中で課題を共有しながら、あと、近接する地域の中で課題を共有してというところで、生活支援コーディネーターの方々初め、各職種でもんでいただいているというような状況ではあります。

それに加えて、第1層生活支援コーディネーターということで、社会福祉協議会のほうで活動していただいています、そこで全体を通した考察ですとか、活動の方向性というものも助言いただきながら、進めているところでございます。

以上です。

【会長】

ありがとうございます。

ほかは、いかがでしょうか。

それでは、続きまして二つ目の議題であります、第1層生活支援コーディネーター活動状況について、資料4のご説明をお願いしたいと思います。

【社会福祉協議会委員】

北区社会福祉協議会です。よろしくお願いいたします。

私のほうから、第1層生活支援コーディネーターの活動状況ということで、3点についてご報告させていただきます。着座にて、失礼いたします。

資料につきましては、資料4を主で、全ておさまっておりますので、そちらをごらん

をいただきながらと思います。よろしくお願いいたします。

まず、北区における地域課題についてということですが、こちらの表につきましては、先ほどご報告がありました、地域ケア個別会議、あとは、地域包括ケア連絡会、それから、後ほどご説明がありますが、認知症の初期集中支援事業等から把握をした地域課題を、昨年同様に、担い手不足、それから、場所の不足、交流・つながり、買い物・生活支援、それから移動の関係、それから、今年度加えて、認知症についてということのカテゴリーで、少し分けさせていただきまして上げさせて、まとめさせていただいている表でございます。

地域課題につきましては、昨年から引き続きの課題、その意味では、なかなか、新たな課題というよりは、ここに上がっているようなことが、やはり、一番地域の中で考え、検討が必要だとされている課題ということになるのかなと思いますが、そちらのほうの課題が引き続きで上げさせていただいております。

取り組んだことにつきましては、30年度にそれぞれのことにつきまして、各包括のほう、各高齢者あんしんセンターのほうで、コーディネーター等々が取り組んだ内容になります。

あと、今後の方向性につきましては、また来年度以降ですね、これからまた新たに、こういった取り組みができるのではないかと、解決に向けて、こういった取り組みができるのではないかとということで、上げさせていただいている内容でございます。全てはご紹介はちょっとできませんけれども、例えば、担い手不足というようなところ、先ほども上がっておりましたが、やはりこういったいろいろな、今後ですね、多世代の方たちにかかわっていただくということも、この担い手を新たにつくっていくということの一つの取り組みなのかなというところでは、その交流やイベントを通して、担い手をふやしていけるような、そういった工夫なんかも、今後していきたいというような意見も上がっておりますし、あとは、場所の不足というのは、常に昨年度からずっと上がっておりますけれども、なかなか、高齢者が行ける施設や場所ということだけでなく、やはり活動を展開をしていこうにも、場所がなかなか乏しくて、活動が展開ができないというようなことの課題というものは、常に上がっているところです。そういったところにつきましても、マップをつくるなど取り組みもしておりますが、今後ですね、今ある居場所の確認、今ある活動の場所、それから活動できる場所ですね。そういったものを発見するというのもそうなんですけれども、既に確認ができているところも、またさらに有

効に利用ができないかというようなことも見直していくということも、必要なのではないかなという意見も上がっております。

あとは、交流・つながりについても、先ほど多世代のことに、王子圏域の話をしていたことにつながることになるのかなと思いますが、幅広い世代を対象とした形の、認知症カフェもそうですし、イベント、あるいは、元気なシニアの方たちの子ども世代にも、いろんな形でアプローチをしていくような取り組みというの、できるんじゃないかなというようにも上がっております。

それから、買い物・生活支援につきましては、既にもういろいろな、独自でマンションなどで見守り活動をしているような、既に活動が少し一歩進んでいるところにアプローチをかけて、生活支援や何か助け合いの活動なんかも、提案をしていくような形で進めていく、そんなことも検討されております。

裏面になりますけれども、やはり交通もそうですけれども、認知症についての課題ということも、今回、認知症の初期支援集中チームのほうで、集中的にお話し合いをされて、ここに上がっているような課題ですね。通いの場の、やはり認知症があるということもあり、通いの場の不足ですね。毎日行ける場所がなかったり、男性参加がしにくかったり、そういったようなこと。それから、困り事に対する支援がないというようなことも上がっております。ですので、そういったことについての解決策、取り組みもしてきましたが、今後、こういった、いろんな不動産会社ですとか、そういったところにも養成講座、アプローチをしていくですとか、後でご説明ありますが、「こんちゃんサポーター」をもっとふやしていくですとか、そういったことで具体的な解決が図れるのではないかなということになっております。

今後の方向性ですけれども、今、挙げたような助け合いのつながりづくり、居場所づくり、そういったような課題をやはり解決していくためには、やはり、高齢者の分野だけではなくて、いろんな分野、多世代、関係団体、そのような、それぞれ、さまざまな方々との、やはり交流とか情報が、どうしても基本になるのではないかな、大事なのではないかなということ。それから、連携して、拠点となる場所についての発掘、それは、特に施設だけに限らず、やはり企業や商店、そういった今まで余りアプローチをしてこなかったところにも、そういった会場の提供、そういったことについて協力が得られるような働きかけを1層も、また2層も、ともにしていくということが大事かなと。

それから、結びになりますが、やはりこういったことを、地域の方に促していくため

にも、多様な主体による支え合い、助け合いの地域づくりを、区としてしていきますよということを促進していくような、また、この生活支援コーディネーターの役割を認識していただけるような、そういった周知も含めて取り組んでいくことが重要なのかなというふうに考えております。

ここでちょっと、認知症の関係で「こんちゃんサポーター」について、事務局のほうからご説明をしていただければと思います。

【事務局】

長寿支援課です。

資料6と7をごらんください。資料6は、こんちゃんサポーター登録制度のチラシです。資料7は、「認知症でも認知症でなくても地域の皆さんが今から出来ること」のリーフレットです。

認知症初期集中支援チームを進めてきておりまして、高齢者あんしんセンターごとに設置していきまして、年に2ケースほど、個別支援を行っているところです。多職種で検討してまいりまして、個別の課題に加えて、たくさんのケースが集まった中から、地域の課題、それから課題に対してどんなことに取り組んだらいいのか、そして、また見直していくということを繰り返しているところでございます。先ほど報告のあった中で、初期集中支援チームと、それから高齢者あんしんセンターの生活支援コーディネーターと加えて検討していた中で、やはり、認知症初期の方が、地域で生活を続けていくためには、ちょっとした支援が大変必要になってくるということ。介護保険サービスは、初期のころですと回数が少なく、生活支援に関してが不十分だということが上がってきておりまして、こんちゃんサポーター登録制度を開始してございます。これは認知症サポーター養成講座を修了した方、現在、2万6,000人ほどおりますけれども、その方々に3時間程度の、これも国で決まっている講座の内容になりますが、ステップアップ講座を受講していただきます。そして、高齢者あんしんセンターで活動体験をしていただきまして、区のほうに登録していただくというものとなっております。

登録されたこんちゃんサポーターは、できることをできる場所でということで、個別の支援を行っていくことになります。具体的には、認知症の人の個別な話し相手と、それから個別の見守り・声掛け支援、さらに、個別の生活支援の中で、ごみ出しであったりとか、内服の声掛けであったりですとか、それから、認知症カフェやサロンへの同行、そして、受診の付き添いなどが含まれております。そのほか、認知症カフェで個別の相

談にも乗ってくださっているところです。今年度、準備を進めてまいりまして、2月から登録を開始してございます。現時点で26名のご登録がありまして、年齢が30代から70代の方となっております。

希望する活動の中で一番多いのは話し相手で、3分の2の方が希望されております。また、半数の方で自宅に訪問できるような、ごみ出しですとか、受診やカフェなどの同行などの希望も出ております。そのほかの周知活動についても、ご協力したいという声も上がっているところでございます。

今後、こんちゃんサポーター、登録されましたけれども、生活支援コーディネーターを中心として、サポーターさんと、サポートを受けたいと思っている方のマッチング等を進めてまいります。

パンフレットのほうをごらんください。そういった地域の認知症の支援等を多くの方に知っていただく必要があるということで、認知症ケアパスを今まで作成してきましたけれども、認知症ケアパスとは、認知症の進行に応じて、いつ、どこで、どんなサービスが受けられるものかを整理したものではございましたが、認知症になってから、あるいは心配されたから手にとるという方が多かったので、今回は、認知症になる前の40代程度の方から多くの方に知っていただきたいということで、1万3,000部印刷いたしまして、回覧板で今、回しているところでございます。

お聞きいただきますと、まず認知症が特別なことではないということで、認知症でも、認知症でなくてもおたがいさまであって、地域は皆さんの力で変わっていきますよという、おたがいさまの地域づくりを進める内容を書かせていただいております。

また、予防についてのできることで、それから、認知症初期の気づきのチェックリスト、そして、お聞きいただきますと、北区の認知症に関するあんしんサービスをお示ししております、その中に認知症サポーターに加え、こんちゃんサポーターのご案内を掲載しているところです。

また、2番のところの認知症カフェにつきましても、先ほどから出ておりますけれども、居場所であるとか、交流の場となりまして、さらには、専門職、医療と、介護と、それから地域のサポーターさんと、地域の人たちのつながる拠点となる場となっております、来年度からは、こちらに医師のほかに、医師に加えて、歯科医師の方にもご協力いただけることになっておりまして、より高齢者あんしんセンターと連携した地域づくりが進められるのではないかと期待しているところです。

以上です。

【会長】

ありがとうございます。

これ、続きましてですかね、もう一回、また社会福祉協議会委員、お願いします。

【社会福祉協議会委員】

では、引き続きまして、2の(2)ワーキンググループについて、ご報告をさせていただきます。資料は、資料4にお戻りいただきまして、1枚おめくりいただきましたところに、ワーキンググループ（赤羽北3さんミーティング）についてということでございます。

赤羽北3丁目をモデル地区といたしまして、地域の方々と話し合いを通じて、地域課題の共有と、社会資源の確認、サービスの創出を目指した取組みということで実施をさせていただきました。

こちらのほうに、流れに沿って進めさせていただいた流れが書いてございます。基本的には事務局となります、2層の赤羽北及び桐ヶ丘やまぶき荘の2層の生活支援コーディネーターと、あと、1層のコーディネーター等と一緒に、桐ヶ丘の支援スタッフとともに、事務局として取組みを行い、話し合いをしながら進めてまいりました。まずは、ヒアリング、地域の皆様に、このミーティングについてのご説明を、目的を明確に説明をしながら、説明をするご案内だけではなく、その際にヒアリングですね。その地域の皆様がどういった気持ちで日ごろいらっしゃるのか。課題について、何か認識をされているか、考えていること。あとは、こういったことに対する感触といいますか、そういったことなどを確認しながら、まずはヒアリングと声掛けというところからスタートをしております。第1回目は10月のほうに開催をさせていただきまして、こちらに23人ご参加いただきましたが、こちらに書いてある皆様とともに、第1層のこちらの協議体からは、委員のほうにご参加をいただいております。

1回目は、互いを知るワークということで、やはり、日ごろ顔を合わせていらっしゃる方々もいるんですが、それぞれのつながりは、縦のつながりはあっても、やはり横のつながり、ささえあい団体と町会ですとか、そういったような横のつながりというのが、やはり、実はないというようなこともありましたので、お互いを知るようなことも取り組みながら、意見交換ということで、皆さんのこんな赤羽北3丁目になったらいいなということでお話し合いを進め、こちらにあるような課題が出てまいりました。事前に目

的を伝えておりましたので、話し合いでは、かなり活発なご意見をいただくことができたのかなと思っております。

このメンバーには、障害の施設の事業所の方もご参加をいただいたりしながら、高齢者に限らず、そういった団体にご参加をいただきながら行っております。

裏面になりますけれど、1枚おめくりをいただきまして、1回目、2回目につきましては、1回目に出ましたいろいろなご意見を、少しキーワードでまとめまして、今度は、そのキーワードごとに選んでいただいて、さらに深い話し合いをして、この四つのチームに分かれて話し合いをいたしました。こちらにあるような、居場所や買い物チームは、まず、居場所をつくることが重要だねとか、あとは、引きこもりの方を外に連れ出そうというような、先ほどの課題にも出ていましたが、そんな課題も出てきて、やはり工夫がどんなふうにできるかというようなことの話し合いなどをしております。

今後につきましては、第3回目につきましては、この1回、2回目のご意見をもとに、さらに見える化する、この課題を見える化した資料を使いまして、これまでの協議会を諮りながら、さらに具体的な、今度は取組みというものに、課題解決の取組み、地域でできることということにつなげていく予定でおります。

このワーキングを行ったことで、エリア設定を2カ所のあんしんセンターということでしたことで、ワーキングを通して多くの関係者の方々と話し合えることができたということと、あとは、単発ではなくて、継続した話し合いをするということの大切さということの重要性なども、さらに確認をすることができたかなというふうに思います。

また、大事なところは、その話し合いを進めるときには、やはり事前のヒアリング、ご案内だけではなくて、ご案内をしながら、事前の調査をこれに合わせてしていったり、あるいは、目的を明確に、明確にし過ぎると、何か仕組みをつくりますよということ、引いてしまって、なかなかそんな大げさのことはできないよということで、引かれてしまうようなこともあるかなということで懸念もありましたけれども、今回は、仕組みづくりを目指していますよということをきちんと明確に伝えたことで、話し合いが、こういうご意見がたくさん出てきたのかなということもありますので、そういったことも重要なポイントだなということがわかりました。

今後につきましては、今回の赤北3さんのこともそうですけれども、後で、後ほどご報告があるかと思いますが、既に実践をしている志茂ジェネ協議会、そういったことも参考にしながら、各地域において、新たな地域のつながりを紡ぎながら、具体的な活動

につなげていけるように、2層のコーディネーターの皆さんが行う地域資源やニーズを丁寧に把握をして、それらを丁寧につないでいくという取組み、そういったことですか、あとは、いろいろな多様な団体、関係者、そういった方たちが、住民の方たちが参画する、いろんな形での話し合いの場、協議体、情報交換をしたりするような、いろいろな単位の協議体の立ち上げということを支援していくことが、第1層としては重点に置かなければならないことなのかなというふうに思っております。

続きまして、すみません、第3項目めですけれども、第1層生活支援コーディネーターの受託事業の実施報告でございます。こちらはちょっと細かいですので、ごらんをいただければと思いますが、少し添付の参考資料として、別紙で地域の社会資源把握に関することで行いましたことで、ひとつご報告をさせていただきたいのが、資料5でございますが、このおたすけ地域ガイド、こういったこのガイドも、それぞれの2層のコーディネーターのほうで資源を把握いたしましたものをカテゴリー別、地域別でまとめさせていただいているものでございます。こちらは、さまざまところにも配付をして、活用していただければということで作成を行いました。

それから、資料4の①と②、グラフ、社会資源のほうのグラフと、あとはマップを皆様にお配りをさせていただいております。細かくは後でごらんいただければと思いますが、グラフのほうでは、少しだけ触れさせていただきますと、各地域の、各圏域ごとの各包括エリアごとのいろいろなどんなグループ、社会資源があるかというようなことも色別で書かせていただいております。こちらは、2層のコーディネーターの皆さんが調査をした結果に、私どものほうでご支援しているささえあい団体及び長寿支援課のほうで養成をしております体操の自主グループの件数を合わせてグラフ化したものになりますけれども、やはり、見ていただきますと、このたすけあいの活動、ちょっとしたものの助け合いの活動というものは、やはり全区的に見ても、なかなか、こちら3件というふうになっておりますけれども、私たちが把握していないものも、あとはまだあるかとは思いますが、やはり、まだまだ少ないというところが見えているのかなと思います。

ただ、一方で、お食事会ですとか、お茶会ですとか、趣味の活動ですとか、ささえあい団体も、そういったものもサロン活動をしているところが多いですので、そういったものですとか、あるいは、体操のグループなどは、こんなにたくさん、やはり各地域で行われておりますので、そういった今ある、既に活動しているグループに、この生活支

援のほうの何かちょっとしたお手伝いというようなことを加えていくような、働きかけをしていくような、そういったことは資源がないわけではないので、あるのかなと思っています。

あとは、マップなどもごらんをいただければと思いますが、各拠点ですね。区内のいろいろな貸し出しをしている会場なども一緒に載せさせていただいているところがございます。見ますと、その会場があるところに、たくさん活動があるというような傾向が見られるというふうな印象を持っております。なかなか、その意味では、滝野川の地域は、以前からも言われておりますが、町会・自治会がそもそも、会館を持っていなかったりするようなところでは、以前からも会場がないということで、課題も上がっておりますが、そういったことも課題として、やはりマップに落としてみても見えてきているのかなというふうに思っております。

駆け足になりましたが、申しわけございません。私からの報告は以上になります。

【会長】

ありがとうございました。1層生活支援コーディネーターの活動状況報告について、ご説明いただきました。ちょっと、資料も多いんですが、まず、最初の北区における地域課題と、取組みと、方向性についてというのを資料4、5でご説明いただきましたけれども、これに関しては、何かご質問、ご意見いかがでしょうか。

じゃあ、ちょっと私のほうから。やっぱりこういった取り組みを進めていく中で、地域での協議体といいますかね、協議会って非常に重要だと思うんですけども、ともすれば、いろいろな会議というのをたくさん地域である中で、住民の方々は生活支援のこの協議体に関して、ほかの会議とはちょっと違う意識を持っていらっしゃるところがあるのか、何かその辺の会議全体に対する意識というのは、これは非常に大事なところだと思うんですが、その辺の何か感触というのはいかなもののでしょうか。

【社会福祉協議会委員】

そうですね。やはり、なかなか難しいという、いろんな、特に町会の皆様であるとか、民生委員さんであるとか、やはり、そもそも既にいろいろな活動をしていらっしゃる方に関しては、いろいろな会議体がある中で、また新たにというのは、なかなか感触的には厳しいというようなお声は聞いてはおりますけれども、今回、ちょっと触れなかったんですけども、報告の中でも、各生活支援の担い手養成、サービス開発に関することということで、(3)番で上げさせていただいて、とはいえ、小さな地域で、今、

それぞれの地域の中で話し合いを、小さな単位でも話し合いの場をつくっていかうということで、取り組みを2層がしております。

きょうなんか、隣にいらっしゃるつつじ荘の方のエリアの中で、堀船の中で町会と、あとは、まあ、そのエリアの中にある大学との連携を模索した、小さな単位の話し合いが行われたんですけども、その話し合いは小さな単位でしたけれども、かなりいろいろなご意見が出て、「住んでよかった、堀船プロジェクト」というのがこれから始動しそうな形でして、やはり大きな、いろいろなタイプのやはり協議体があってよろしいのかなと思っています。ほかの地域でも、まずはシニアクラブの皆さんだけを呼ぶとか、まずは町会の皆さんだけを、見守りしていらっしゃる方だけを呼ぶとか、そういったような、既存のものに捉われずに、いろいろな形のタイプの協議体をつくっていくことで、そういう意味では進めていくことができるのかなという感触は持っています。

【会長】

今、非常に大事なことをおっしゃったと思うんですね。いわゆる、行政の方が招集というか、お願いしてお集まりいただくような協議会と、地域から自然に意見が出やすいような協議会等からは、また少しちょっと違うかと思うんですね。そういう意味では、地域地域で構成するメンバーも違えば、またその方々も、必要に応じて出入りができるといったようなところも大事かと思うんですね。そういう意味で、せっかく幾つかモデル的に協議会をバックアップされているのであれば、どういうタイプが、どういうときにはいいのかとか、協議体の持ち方一つにとっても、いろいろまた、情報共有していただければ、非常にいいかなと思いますので、よろしくお願いいたします。

ほか、いかがでしょうか。じゃあ、委員、お願いします。

【委員】

高齢者あんしんセンターです。

今、社会福祉協議会委員のほうからお話がありました、本日の午前中にできたてはやはやの協議体なんですけども、先ほど会長のほうから、参加されている方のお気持ちというか、どうなんでしょうかというお話だったんですけども、もともとは町会長の方から、うちの町会にこんな課題があるんだよねというところから、その課題をじゃあこういうところに広げてみませんかという、私、ほんのちょっとだけお手伝いをしましたら、もう会長さんみずから大学のほうにお声かけをしてくだって、その大学のほうから今度は医療機関にお声かけをしてくださって、私がおつなぎしたというのは民生委員の方、

あとは日にちを決めただけ。あとは、皆さんがもう本当に自由活発に意見を出して下さって、で、地域にこんなに、いろいろやりたい方がいるんだというのを、きょう、初めてというか、改めてというか、わかりました。こういう小さな会議体というのは、どんどんどんどんつくっていくべきだなと思いますし、やはり難しいなというすごく構えた部分もあるんですが、今後いろんな方にお声かけをして、その参加された中にも、例えば医療関係の方は、じゃあ堀船地域だったら、うちの職場に働いている子育てしているお母さん、今度連れてくるよという形で言ってみたりとか、そんな形でいいと思うので、どんどんどんどん広げていけたらいいなというふうに、きょう思いました。

【会長】

ありがとうございます。

ほかは、いかがでしょうか。

それでは、例えば、先ほど関連する事業ということで、長寿支援課のほうからも、こんちゃんサポーターとか、認知症の地域啓発のパンフレットのご説明もありましたけれども、あわせて、ご質問、ご意見、資料4、5、6、7ですね、合わせてご質問、ご意見あればいただきたいと思いますのですが、いかがでしょうか。

委員、お願いします。

【委員】

この社会資源マップというのは、公開をされる予定はあるのでしょうか。

【委員】

今のところは、まだ公開ということは、まだ考えてはいませんが、そういったことも必要なのかなというふうには考えてはおります。

【委員】

お隣の板橋区さんでは、見えるじゃないですか。何か見られると、また、広がりもしていくのかなと思いますので、ぜひ、ご検討をお願いします。

【会長】

ありがとうございます。社会資源の見える化ですね。これに関しては、また、私のときにもちょっと説明するかもしれませんが、やっぱり紙ベースですと、どうしても情報が古くなりますので、ウェブで情報が更新できるようなシステムの導入なんかも、ちょっと、我々も開発している部分がありますので、もし、そういうのも導入できれば、情報は実際集めるのは、確かに住民さんと一緒に集めて、それを管理したり、アップデー

トをするのは、ちょっと、そういうハイテクの部分を使うというのもいいんじゃないかなとは思いますが。ぜひ、またご検討いただければと思います。

ほか、いかがでしょうか。委員、お願いします。

【委員】

先ほど社会福祉協議会委員のほうからご説明あった、赤北3さんミーティングについてなんですけども、こちらのほうの、今、会長がおっしゃった参加者の方が、どんなような様子だったのか。その参加されている方のその思いというか、そんなのをちょっとお聞かせ願えればありがたいと思います。

【会長】

いかがでしょうか。

【社会福祉協議会委員】

やはり、それぞれ皆さんがそれぞれの活動をする中で、例えばサロンの活動をしていらっしゃる方からは、やはりその方から見える、心配だから声をかけても、なかなか出てきてくれなくて、でも心配でというようなお話があったり、あるいは、民生委員さんからはもう本当に個別の心配な世帯のお話があったり、あるいは、自分にできることがないかというところでは、やはり自分はこのまちの歴史をすごくわかっているから、そういったことを切り口にして、次の世代を担う若者たちに、このまちをやっぱ好きになってもらう。そのことで、行く行くは助け合いとか、そういったものにつながっていくんじゃないかというところでは、そういったことで貢献ができるんじゃないかとか、あるいは、事業所、デイサービスセンターの事業所の方が、自分の事業所が休館しているときに、ぜひこの資源を使ってほしいだとか、何かそういったような、それぞれの立場で、その仕組みづくりということを目指したご意見をいただけたのかなというふうには思います。

ただ、実は高校などもこのエリアの中にはあるんですが、なかなかその高校のハードルがやはり高かったというところがありまして、今後は高校ですとか、また保育園ですとか、ちょっと具体的な取り組みが見えてきたところで改めてかかわっていただける具体的な部分をご提案をしながら、ウインウインといいますか、そういった高校にとってもプラスになるような形でかかわっていただくということも、課題としては必要かなというふうには思っております。

【会長】

はい。ほか、いかがでしょうか。

じゃあ、もう一点だけ私のほうから。

今、例えば、住民の方といろいろ意見交換されて、歴史を何かこう題材でいいんじゃないかとか、いろんなアイデアが出るかと思うんですね。またこの協議会でアイデアを出したりとか、方向性を決めていくというような事業だと思うんですけど、それをまた、実際、実践するとなると、また違う人材なり、違うメンバー構成も必要かなと思うんですね。後ほどのちょっと、志茂ジェネなんかも、やっぱりそういった構造をどうするかというのが、一番知恵のひねりどころといいますかね、課題かなと思うんですけど、そのあたり、今後、地域でそういう実践していただければそうな人材の育成とか導入というのは、何かありますでしょうか。

【社会福祉協議会委員】

まだちょっと、その人材育成というところまではまだなんですが、ただ、この活動を始めしていく中で、同じような居場所づくりの活動を喫茶店の方でやってみたい、実際にやられているような方を発掘したりだとか、先ほどの高校のこともそうですが、そういったところでは、またちょっと、新たな方たちを、もう少しちっちゃな、具体的なプロジェクトは小さな単位になるかなと思いますので、その中に入れていくということで、そこを進めていくということは、まずはそこまでは決まっているので、そういった形で進めていきながら、当然、人材育成みたいなものも、やはり考えていかなくちゃならないのかなとは思います。

【会長】

ありがとうございます。本当にそのとおりだと思います。確かに人材育成、ゼロから始めるというのは、必ずしも簡単なものではありませんので、一方、やっぱり北区なんかですと、本当にいろんな団体さんとか、その部分を担ってもらえそうな既に活動家の方なんかもいらっしゃると思いますので、そういった方をいかに巻き込んでいくかというところで、そういう意味では、メンバーも流動性があるって、やっぱり新たなメンバーとしてこういう人が必要かなというときに導入されてというようなところが必要かなと思いますので、やはり、コーディネーターのコーディネート力が一番問われるところかなと思いますので、頑張っていただければと思います。

ほかは、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、ここまでの第1層生活支援コーディネーター活動状況の報告は、ひとまず

以上ということでさせていただきたいと思います。

それでは、続きまして、今までの生活支援コーディネーターの活動とか、あるいは、その前の3圏域の地域ケアの連絡会なんかと、かなり共通している部分もあるかと思うんですけども、ちょっと私どもの研究チーム、研究所が、区役所のご協力というか、連携していただいて、この3年間にわたって取り組んでまいりました、ニックネームで「志茂ジェネプロジェクト」というのを推進してきたんですけど、その今までの経過といえますか、一まとめご紹介させていただければと思います。

この志茂ジェネプロジェクトといえますのは、もともと、国の研究助成をいただきまして、3年間するというところでやっております。国の研究助成といいましても、その地域づくりをどうしていくかといったような、そういう研究助成なんですね。同じようなプロジェクトが、また、ほかの地域なんかでも少し似たりよったりのことをやっている場合もあるんですけども、今回、大きなメーンのキーワードというのが、持続可能な多世代共創社会、「共創」と格好よく言っているんですけどね。この共創社会をつくっていくためのデザインといったような、そういう国の大きな演題がありまして、それに向けて、複数の大学とか研究機関が、それなりの切り口でこの研究を進めていくという、そういうものでございます。中には、エネルギーとか環境問題で持続性というのをやっているところもあるんですけども、我々の研究チームは、ここを出ています地域の、後ほど言います、ジェネラティビティで紡ぐ重層的な地域多世代の共助システムの開発。共助、これは互助と同じなんですけど。こういったものを北区さんのご協力をいただきながら展開してまいりました。

このキーワードであります多世代と、共助・互助というところのこの二つが、実は、言葉では簡単なんですけど、一番難しいところだと思います。誰しも多世代、多世代っていいよねというようなことを言いますけども、じゃあ、そういう多世代のメリットは何なのかと、あるいは、多世代がコラボレーションするというのが、どういうそのノウハウが必要なのかといったようなこと。また、そういった多世代という難しさ、またその意義というものと、共助・互助というところなんですね。ささえあいというものは、今、言葉では、これも耳障りはいいんですけども、実際、地域の人同士、いきなりごみ出し助けますよとか、あるいは電球交換しますよといって、それがすんなりいけば、誰もこの生活支援の協議体も苦労しないわけですし、そこまで至るのにどうするのかといったような、その仕組みを開発していくというようなものでございます。

まず、なぜ多世代というアプローチを我々が重視してきたかということなんですけども、要は、つながりづくりなんですね。防災であろうが、防犯であろうが、健康であろうが、見守りであろうが、やっぱりつながりがない、つまり孤立というものをこの地域でどれだけ改善していくかということに大きくかかわってくるかと思うんですけども。

孤立というのは、何も高齢者だけの問題ではなくて、子育て世代もそうですし、若者の引きこもりもそうですし、今後、深刻になってくる外国人がふえてきたときに、外国人自体が孤立すると、またそれがコミュニティのいろんな問題になってくるというようなことで、とにかくやっぱり、つながりというのが、これから大事だと。

そのつながりがなくなってくることによって、いろいろ各世代とも不安とか、不便とか、それが積もり積もって、いろんな不健康な問題が起こってくるということなんですけども、それは多世代でアプローチするというのは、やはりその地域地域で、次の担い手という持続性という問題もありますし、多世代がかかわったほうがいろんなアイデアとか、あるいは、力でもって解決しやすいこともあるだろうと。

先ほど、3圏域でのお話でもありましたような、子どもの見守りというのは、高齢者の見守りともそう変わらないだろうと。あるいは、マンションのオートロックの問題も、どの世代にもかかわってくることでして、高齢者だけが考えるのではなくて、多世代で考えるほうが、案外効率いいこともあるだろうということなんです。その世代を超えて助け合う仕組みづくりをということなんですけれども。これが今、一方で求められているその共生社会への入り口だというふうに思います。共生社会というのは、どうしても「我が事・丸ごと」というんですけども、なかなか我が事になりにくい部分が多いかと思うんですね。いきなり、若くして障害を持っている人が周りにいないのに、若い人も障害者のことを考えると、あるいは、身の回りに認知症の人がいないのに、認知症のことを考えろといっても、我が事になりにくいと。でも、我々は、この世代というもので切りますと、どこかの世代で、たしか、そういうと、小学校に、同級生にこういう子もいたなとか、あるいは、同じ高齢者の方でも、ボランティアしてくれる人もおれば、認知症の方もおられるよねとかですね。世代で切っていくと、どこかに我が事になってくるんですね。

よく、昔、仏教もいろんな教えで言う言葉で有名なのが、「子どもを叱るな、皆来た道だ」と。「年寄り笑うな、皆行く道だ」というような言葉があるんですね。そういうふうに、やっぱり世代で切るというのは、やっぱり実体験、我が事になりやすいだろう

ということで、そういった意味での多世代というのは、非常に有効なのではないかなというふうに考えております。

特に、多世代といっても誰がまずは主人公なのかといったことを考えたときに、やはり、目上の人、高齢者の方が担うほうであっても、担われるほうであっても、やっぱり今、メインで主人公になっているのが、これはもう実情だと思います

高齢者にとっても、次世代へ何か託すとか、世代に交流すること自体が、高齢者にとっても、自分自身が次のその超高齢期に超越していく、悟っていけるといいですかね、いつまでも自分にこだわるのではなくて、次の世代にバトンタッチしていくということ自体が、ご自身も一皮むけて、次、安寧な生活を送っていくというので非常に大事だろうということで、これを次世代継承感と言いまして、片仮名で言うとジェネラティビティ、これが志茂ジェネのジェネというところから始まっております。

こういうその理論があるわけなんですけれども、僭越ながら、北区の政策に反映しますと、この志茂ジェネプロジェクトがうまくいくと、「長生きするなら北区が一番」と、「子育てするなら北区が一番」が、一朝一夕でできるんじゃないかなというような、そういう相乗効果を目指しているというような大きな話でございます。

やはり、どういった仕組みをつくっていくかというときの、これ、トップダウンで考えていくとか、いきなり住民さんに丸投げといっても、何もアイデアが出ていないわけなんで、やはり、3年間にわたって、この協議体というのを重視して、新たに立ち上げていただいております。研究所と、北区のさまざまな行政の部門の方々が土台をつくっていただきまして、大体、月に一回ずつ地域振興の部屋をお借りして、住民の方々を集めて会議をしてまいりました。その構成メンバーも、もちろん町会、民生委員の方々という支援団体のコアのメンバーの方に加えて、シニアクラブですとか、介護予防リーダーといって、高齢の部門の住民の団体の方もあれば、子ども領域ですね、子ども交流館、あるいは子ども家庭支援センター、これは志茂地区がベースですので、志茂の地域の小学校、中学校の先生方に入っていたいたり、スクールコーディネーターで入っていたいたり、もちろん、あんしんセンターさん、社協さんが中核として入っている。それ以外にも、もちろん、このシルバー人材さんなんかも、いろんなその生活支援なんかと非常に関係しているので、入っている。また、民間の子育て支援しているような会社ですとか、あるいは、NPOさんなんかもお入りいただいたりというようなことで進めてきたわけなんですけども。

こういった協議の中で、どういうことをしていこうかというものですけれども、やっぱり我々も、それまでにいろんなその先行事例なんかを、かなりリサーチいたしまして、どうにも、いきなり支え合いといっても、ちょっと敷居が高過ぎるだろうと。それには3層の構造といいますか、土台固めが必要だろうということで、まず、皆さんとちょっと意見交換しましたのが、入り口として、ちょっとした声かけとか、挨拶とかができる地域と。それも多世代でちょっとした挨拶、声かけができるような地域というので間口を広げたらどうだというのから始めました。

その挨拶と声かけというのできるような地域をつくっていくのと同時に、やはり交流の場をつくっていくということも大事だろうと。交流の場を通じて、いろんなブロックとか、いろんな集いで集まっている中で、ちょっとした困り事が言えるような関係性をつくっていくということが大事だろうということで、この3層の支え合いというのが基盤だろうということで話を進めました。

まず、この心の支え合いというところなんですけれども、挨拶運動ということで、この志茂の地域では、今どき、やっぱりこの挨拶の、いきなりこんにちはと言うと、きゃあ言われることもありますので、ちゃんとその見える化するようなグッズを、リストバンドですとか、タグをつくって、活動をちゃんと見える化しましょうと。こういうキャンペーンをやっているんですよということを見せると。また、後ほどご紹介しますが、住民の方でも、こういう挨拶のキャンペーンを担う担い手さんも必要だろうというようなことで、活動を展開しました。実際に、このPRグッズなんか、こういうのをつくったりとか、そのキャンペーンのマークを、ロゴマークも募集しようということで、地元の赤羽の中学校の学生さんのデザインなんかを採用して、こういった志茂ジェネのマークをつくったりというようなことでやっております。

挨拶をする人たちに向けて、こういうリストバンドとかベストなんかをつくったりというようなことで、こういうものを販促をしたりというようなことをしております。

実際にじゃあ挨拶といっても、どういうときにどういう挨拶をしたらいいのかといったようなことで、その挨拶自体のやり方とか、自然な挨拶の仕方なんかのちょっとミニ講座なんかの出前講座をさせていただいたりとか、あるいは、イベントのときにこのキャンペーンのグッズとか、挨拶のそういったキャンペーンなんかもしたりというようなことをしていました。

住民さんで、やっぱりこの一番で挨拶を積極的にやっていただく方というのを募集し

ましたところ、これ、「あいさつさん」というニックネームを住民さんが考えられたんですけども、こういった方々や、学校の行き帰りですとか、地域で積極的に挨拶をされると。で、みずべの苑の職員の方で、ご自身も通学・通園中の子どもたちにも挨拶されているという、こういうような、そういう風景もよく見られています。で、実際、120名の「あいさつさん」という方が登録をされて、今も日常のあいさつ活動をされているというようなところであります。

それが少し、挨拶のその次の段階として、交流とか、居場所づくりというところで、その集いの場をつくりましょうということで、そういう場を探しておりました。交流の場に、いろんなパターンがあるかと思うんですけども、まず、いきなり交流の場がない場合はイベントで、まち歩き体験ですね。多世代でまち歩き体験なんかも企画してやりましたし、さらに、多世代交流サロン、これも当初ですね、なかなか手ごろな、そういう空き家みたいなものがなかったもので、地元で子育て支援をやっていたママさんの株式会社の「ほっこり〜の」さんのご協力をいただいて、ママさんのサロンに高齢者の方が、例えば子ども食堂の応援に行くとか、多世代交流の時間を一緒にマネージするといったような形で、ママさんのところにシニアさんが入っていくという、そういう活動をしておりました。

そうこうしているうちに、たまたま、これはご縁がありまして、地元のこの協議会のメンバーの方の中で持っていたママさんの空き家がありまして、それを社協さんに借りてもらっていいよというようなことでお声かけいただきまして、社協さんがそれをお借りいただいて、そういった常設の場というのが、今、去年の8月ぐらいからできまして、そこを拠点に、今現在、いろんな交流の活動をしているというようなところでございます。

具体的には、そういう交流のイベントというのを、そういうまち歩きですとか、いろんな地域のイベントのときに、この多世代交流を強調するようなイベントをするというようなこととか、あるいは、先ほどのそのママさんの交流のサロンのところにシニアの方が応援に行くといったような取り組みをしておりました。

先ほどの空き家なんですけど、これ、具体的に、志茂四丁目に空き家をお借りすることができましたので、「しもぞうハウス」という、この名前も協議会で住民さんの方々と一緒につけたんですけども、こういった空き家を共有の場所として、カフェタイムをしたりとか、あるいは、多世代交流に関係するようなほかの団体さんですね。絵本の読

み聞かせのサークルとか、体操の団体さん、こういった方々に共通の認識の中で一緒にこの部屋を運営すると、回すといったような、そういう取り組みが始まっているというところであります。

こういう交流の場というのは、先ほどもいろんなところで、これからやっぱり、つくっていく必要があるかなと思うんですけども、最終的に、集まって楽しただけでは、ちょっとやっぱり、最終のゴールというのは不十分ですので、そこに集まる人が、その先、何かあったときには、やっぱり助け合ったりとか、支え合ったりできるような関係性まで持っていくという、ここの最終ゴールというのが、非常に難しいところなんですけど、ここを目指すというのが、今回のモデル研究としての一つのゴールでありまして、で、支え合いの仕組みづくりというので、三つのパターンというのがあるなということがわかりまして、一つは、その助け合いというのを簡単に、いついつ何々、ちょっと、ごみ出しお願いしますとか、電球交換お願いしますみたいなものをウェブでちょっと、マッチングするようなシステムというの、これもちょうと、お試したことなんですね。残念ながら、これはあんまりですね、ママさん向けの、ママさんの子育ての送り迎えとか、子どもの預かりでは、うまくいっているシステムで、非常にビジネスとしても成立しているんですけども、高齢者の困り事というのは多種多様で、こんなウェブで対応できるほどのものではないというようなこともありまして、ちょっと、そのウェブ自体に、まだまだ高齢者の方が親近感を持てないというところもあるんですが、まあ、なかなかちょっと、これはまだまだ難しいだろうという。逆に、まだまだアナログの助けるというのも大事だろうということで、先ほどの「しもぞうハウス」というところで張り紙して、こういうことができますよ、で、こういうことを助けられますよといったような掲示板なんかもつくりましょうというようなことになりました。

で、この掲示板を利用するに当たって、まず、高齢者の方というのは、お互い、何で困っているかということ自体を再認識するところから始めようということになりまして、「おたがいさまゲーム」というのを、ちょっと開発しまして、自分の困り事を再認識してもらうようなカードゲームですね。こういうものを導入して、これも子育て世代の方も、高齢者も一緒に、そういうゲームを楽しんで、自分のそのSOSを再発見してもらう。こういう機会を遊びながらやってもらうという、そういう仕掛けをいたしました。

その中で、特にじゃあ、どういう助け合いかというと、案外、その、ごみ出しとか、あんまりヘビーなものは求めないと。また、お宅へ上がり込んでお助けするということ

は、あんまりまだまだ、ちょっと初期の段階としては大きいだろうと。むしろ、この集いの場で解決できるようなことにものすごくニーズがあるということがわかりまして、例えば、これ、高齢者の方ですと、ちょっとこのスマホの使い方がわからないとかですね。あるいは、逆にママさんの世代なんかも裁縫ですね。幼稚園バッグをつくるのを、作り方がわからないとかですね。ちょっとその縫い物なんかが、逆に、今のママさんがミシンを使ったことがないというような人もいたりというようなことで、まだまだ、そのおばあちゃんの知恵袋的な、あるいは、おばあちゃんの技というのがニーズがあるというようなこともわかりまして、この拠点で、この場所で解決できるような助け合いから始めましょうということで、現在も展開しています。それに、もうちょっとこの、エスカレートというか、進化していったら、その時間外とか、あるいは場所以外でも助け合いになってくるといような事例も、これは、北区以外のほかの地区なんかでも、そういう事例も見えてきましたので、まずは、その場で解決できることをやっていきたいと思いますというようにあります。先ほどの「しもぞうハウス」というところで、こういう張り紙なんかをしたり、おたがいさまのゲームをしたりというように。拠点で、裁縫を通じて、シニアの方がママさんにいろいろ教えているというようにところもあります。

こういったその取り組みなんですけども、どうやら、まだこういうように一步一步やっていて、高齢の部分を中心にやっていけば、その支え合いのニーズとか、あるいは、実際のお助けもできてくるんじゃないかなということで、ちょっとその明かりが今、見えてきているところなんですけども。

今後の、やっぱりずっと継続してやっていく上において、仕組みとしては、やっぱり、その、先ほどの初めのこの協議会というようにもので、今後どういうものが、この志茂の地区で助け合い、あるいは多世代で交流していくのに必要なのかということを再認識したりとか、確認したりするような協議会というものが、まずは誰であると。とはいっても、皆さん、協議会へ集まれる方というのは、本当に二つも三つもいろいろお役されているお忙しい方々なので、実戦部隊の方も必要だろうということで、このまちプロといいまして、まち・人・くらしプロモーターという、そういう人材、ボランティアさんを同時に養成していきまして、この方々に実際の居場所の運営ですとか、あるいはイベントのいろんなコーディネートなんかをしてきていただいているというように、そういう流れをつくってきております。

こういった取り組みなんですけど、3年間にわたってやってまいりまして、やはり、大事なものは、モデル事業としては一旦、終わりましたので、できるだけこういった仕組みのいいところを、北区全体で取り入れてもらってやれば、非常に幸いかなと思っておりまして、現在、三つのマニュアルをつくっております。で、一つは、そういう、あいさつの運動をどうしていくかといったようなマニュアルと、もう一つは、交流とか互助のその場をどう運営をしていったらいいかといったようなマニュアル。そうしますと、一つが、その協議会の持ち方というのが、今、マニュアルとしてつくっていております。で、そういうものを使って、今後、またほかの地域でも横展開していくことができれば、非常に我々としても光栄かなと思っております。

今後の考え方なんですけれども、こういった志茂ジェネのプロジェクトというのを見ましたところ、初めに申しました、心の支え、挨拶の部分とか、あるいは交流の部分、支え合いの部分というのがあるんですけれども、地域包括ケアの、いろいろ生活支援、あるいは地域支援事業というのを考えたときには、この、基本的には3層と、さらに、その上に実際に介護保険によるプロフェッショナルがなされるそのサービス、あるいは支援という、専門的な支援と、実際にこの4層から成り立っているんだろうというふうに思います。この4層の部分の、特に1層目の専門的支援は、もう本当に今までどおり、この介護保険の枠の中で、きめ細かいサービスをされていくということだと思うんですが、それだけでは、やっぱり賄えない、あるいは、そこまで専門職が出ていくほどのものではないような支援ですとか、あるいは、支え合いというのは、たくさんあるわけですし、その下の三つの層を、これからやっぱり生活支援の協議体、あるいは、介護予防といったようなところで進めていく必要があるんじゃないかなと思います。

実際、これを進めていく中で、先ほども皆さんからのお話にもありましたように、全くこの北区、いろんな地区に分かれていますけど、資源とか、人材がいらないわけじゃないんですね。それをいかに見つけてきて、その方々に、またその違う役目を一緒にやっていただいている、コラボレーションしていくかということだと思うんですけども、まずはやっぱり、この地元のその地域の資源を、地域の社会資源を把握するというのが重要かと思うんですけども、その把握したものを、今までは紙ベースで、ちまちままと年に1回更新していたんですけども、オンタイムでやっぱりこのウェブなんかで管理して、それを生活支援コーディネーターさんとか、あるいは包括さん、あるいは社協さん、こういった方々が、適材適所に情報を、一般の先ほどの協議体の方とか、住民の

グループの方にフィードバックしたり、あるいは住民の方々から得るデータを、また、その専門職の方が情報を管理したといったようなことで、情報の地域の資源の掘り起こしと、それをまた実際に、その横展開していくといったような、そこら辺の仕組みをつくっていくということができれば、これは本当に志茂だけでなく、ほかのこういうパターンを考え方で取り組んでいただければ、ほかの地域でも非常に、こういう重層的な支え合いのシステムというのが、できていくんではないかなというふうに考えております。

まだまだ、これはようやく3年間、3年半、この研究期間が終わりまして、何とか、社協さんとあんしんセンターさんの運行協力、ご尽力で、実際の地域の生活支援の協議体的な機能を持つところまで、大分来ているのではないかなと思いますので、また逆に、皆さん方のいろんなお知恵をいただきながら、我々のほうも、ずっと側面支援していきたいと思っておりますので、また、よろしくお願いいたします。

それでは、とりあえず、ご報告をいたしました。

この取り組みですけれども、もし何か、今まで全体の意見とか、取り組みのご報告も兼ねまして、ご質問とか、あるいはご意見とかあれば、いただければと思います。あるいは、また補足で、社会福祉協議会委員、あるいは、きょう、生活支援コーディネーターとして、もう、大黒柱で頑張っていた方もいらっしゃいますので、もし、追加で何かコメントをいただければと思いますが。何かありますでしょうか。

何か、全体通しまして、ご質問とか、ご意見、いただきたいと存じます。

【委員】

ありがとうございます。これまた、せっかくここまでなさった事業でいらっしゃいます。今後の計画とか、もしわかったら教えてください。

【会長】

ありがとうございます。これは基本的に私らのほうも側面支援といいますか、余りこれずっと研究所がかかわっていると、自立性というものがありませんので、もう、むしろ、今、本当に上手に、あんしんセンターさん、社協さんが、皆さん引っ張っていくような形でやっていただいていますので、本当にそういう意味でうまく自主化、自立化ができて、その意味では非常に我々も安堵しております。

逆に、また我々としては、もっと全国的にほかの地区で、もっとアイデアを凝らしたこととか、これはいけるんじゃないかといったようなものがあれば、皆さんにまた打診しまして、これらの導入なんかも考えていただきたいと。

逆に、また、こういう集いの場というのは、基本はお元気な高齢者の方、あるいは、子育て中の方がいらっしゃいますけども、やっぱりそれぞれリスクを持っている方もいらっしゃいますので、ぜひ、先生方にもちょっと医療との連携というところも、バックにはやっぱり地域の先生もいらっしゃるんだというようなところは見せていただいたほうが集まりの場としても住民さんも安心だと思いますので、ぜひ、ご協力をお願いしたいと思います。

ほか、何かよろしいでしょうか。

何か、せっかくですので、事務局のほうからも、最後、一言何か。

【事務局】

長寿支援課長です。

どうもありがとうございます。志茂ジェネの取り組みは、本当に、とてもすばらしい方向が向いて、よかったなと思っているところなんですけれども、やはり役所の中でも、せっかくこういった研究事業をしているということが知られていない状況にありますので、ぜひ、来年は役所の中でも、少し学習会を開かせていただいて、地域包括ケアは、本当に高齢に限ったことではないので、その辺を広めていけたらいいかなというふうに思っています。

【会長】

今後の、国のほうの動向を見ておりましたが、ひとつやっぱり、ちょっと厚労省の方なんかといろいろお話をしていましても、次の第8期ですかね。その介護保険事業計画においても、特に地域支援事業でも、集いの場、通いの場というのは、もう大重点項目になるようなんですね。それも、今までの必ず通いの場では体操しないとポイントにならないとかいうではなくて、多様な、ユニークな通いの場をどんどんつくっていくということが大事だというような発想になっております。ですので、まあ、北区でいろんな、その通いの場が出ていく中にも、その一つの事例だということも言えるかと思いますが、もう一つは、初めにも申しました、これから共生社会というのを先取りしたときに、やっぱり一般の地域の住民の方が、いろんな世代の方が集まっている中で、またこういった場所をつくっておくと、そこにはやっぱりハンディを持った子どものお母さん方も来るでありますでしょうし、また、認知症の方も来る可能性もあるというようなことで、その間口がやっぱり広がると思うんですね。ですから、そういう共生社会に向けた入り口という意味でも大事かと。

じゃあ、なぜにその地域包括ケアで高齢者の所管が中心にやる必要があるかということなんですけども、これはもう、やっぱり国のほうでも、まあぶっちゃけた話、一番ちゃんとそこだったらインフラが整備されていて、予算もあって、包括さんというのは物すごい拠点もあってというのを考えると、これが逆に子育てのほうからこういうことができるのかというと、確かに、今、子ども・子育て包括支援センターって仕組みはできていますけども、まだ個別対応しかできていないんですね。地域づくりというレベルまでなかなか行っていないと。じゃあ、障害も同じでありまして、なかなか地域でのマジョリティにはなりにくいという部分があるんですね。ただ、そうすると主人公があくまで高齢者であって、高齢者が担い手として活躍すれば、国のほうもどんなそれが対象が子どもであろうが、障害であろうが、外国人であろうが、高齢者が活躍して、それによって高齢者も元気になって、最後はその居場所を高齢者も使えるならどんどんやってくださいというような流れですので、ぜひ、そういった縦割りの限界を、高齢者のほうからちょっとずつ、すき間をあけていっていただければ、非常にこういった共生社会のモデルにはなるんじゃないかなと思っております。

何か、そういう妙なまとめになってしまいましたが、とりあえず、ご報告をさせていただきました。どうぞ、委員。

【委員】

一つだけ質問させていただきます。この志茂ジェネの、今、スライドを見せていただきまして、男性が余り映っていないなというのがやっぱりありまして、男性の参加というのはどんな感じなんですか。

【会長】

実際ですね、子育て世代との連携ということ考えたときに、通常のやっぱり集いの場とかは、どうしてもママさんと、おばあちゃん、我々もなかなか、役所の方と一緒にないと、ちょっと見学に行くのもはばかれるかなみたいなところがあるんですね。ですので、通常の交流の場では、支え合いは、もう基本はママさんとおばあちゃま世代でいいかなと思うんですけども、ただやっぱり、このまち歩きのイベントですとか、あるいは、もうちょっと力仕事の要るときなんかは、やっぱり男性のニーズが出てくる場合もありますので、その子育て支援への入り方というのを、ちょっとケース・バイ・ケースで、どういったものが受けるかなというのはあるかと思うんです。ただ、今回のその志茂ジェネの「しもぞうハウス」の取り組みの中に、絵本の読み聞かせの団体さんも

活動されています。これも、もともとちょっと、我々のほうがその読み聞かせをして、ボランティアさんになって、自分の脳トレもしましょうというような活動で、世代間交流の一つのプログラムということで、北区の認知症予防事業として取り上げられて、その卒業生の方々なんですけど、その方々の中には、男性もいらっちゃって、そういう、男性が入ってもおかしくないような、そういったような堂々と入って行って、おじいちゃんと言って、もうすごく人気者になっているというようなところがありますね。ですから、男性に関しては、ちょっとどういう設定で、どういうプログラムの入り方があるかというのは、いろんな意見をいただきながらというふうに思っております。

では、大体、ほかはよろしゅうございますでしょうか。

それでは、以上できょうの全ての意見交換議題は終了いたしました。これは、この後じゃあ、事務局のほうからでしょうか。来年度のスケジュールのご説明していただくということでよろしいでしょうか。

【事務局】

来年度のおたがいさま地域創生会議でございます。また、年に2回を予定しております、第1回目は、今年度もでしたが、7月ぐらいになるかなというふうに思っております。また、ご案内を差し上げますので、どうぞよろしくお願いいたします。

【会長】

それでは、委員の皆様にご協力いただきまして、ありがとうございました。来年度は、今回出ましたいろんな世代とか分野を超えて、居場所やつながりを持てるような拠点をどんどんつくっていければいいんじゃないかなと思っております。地域の団体の皆様、また、企業とかですね、商店街のほうのご協力なんかも、非常に重要なことになるかと思っておりますので、また、皆様のアイデアをいただきながら、具体的な動きへと進めていければと思っております。

会議を閉じるに当たりまして、副会長であります健康福祉部長から、一言ご挨拶をお願いいたします。

【副会長】

皆さん、お疲れさまでございました。きょう、志茂ジェネの取り組みも、会長のほうからお話がございましたけど、実は、先週まで区議会の予算委員会、やっけてまして、今回、予算委員会の中では、ある議員さんが、地域のきずなをテーマに取り上げておりました。その中で、福祉の款では、まさにこの志茂ジェネについてご質疑がありまして、

地域の多世代交流等の取り組みとして好事例だということで、これから広げていってほしいみたいな話のご質疑があつて、非常に関心が高い分野かなというふうに理解してございます。

また、きょう、午前中には、私、別の会議で消防署のほうの地域防災の絡みの会議に出ていたわけでしたが、その場では、消防署さんのほうの話では、ひとり暮らしの世帯の方々の訪問とかしても、なかなか消防署員が一人で行っても、部屋の中へ入れていただけないというようなことのお話でございまして、あんしんセンターのケアマネさんとか、地域の方々が一緒に行ってくれと、すごく顔の見える関係ができていて助かるんだというようなお話が出てございました。

そんなようなことを考えると、やはり、こういうこの会議体もそうですが、日ごろから顔の見える関係をつくっていくということが、非常に重要かなということで、これから超高齢社会を迎えていく中では、やはり、この会議で検討されている事項なんかも含めて、引き続き取り組みを深めていただいて、次年度以降もまた進めていただきたいなというふうに思っているところでございます。

この前の会議のほうで、高齢者あんしんセンターの取り組みとかも紹介されてございましたけど、その中でも、会長のほうからもありましたが、介護保険制度については、国のほうもさまざま取り組みに対して評価を自治体がするように言われておりまして、それに伴って保険者機能強化推進交付金という交付金が交付されることになってございます。その交付に当たっては、やはり、この区の取り組みとして、高齢者あんしんセンター初め、介護予防事業、さまざまな取り組みをしっかりと進めていくことで、区のほうの歳入もふえていくというようなことにもつながりますので、ぜひ皆様方、今後ともご協力をお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

本当に、きょう、長時間にわたりまして、特にこの前の回から参加されていた方々、4時間ぐらいにわたっての会議になりました。どうもありがとうございました。

【事務局】

ありがとうございました。